

十二小預言書に学ぶ

2016.11

石井田 直二

はじめに

本稿は、L C J E 日本支部の機関紙に 2015 年 5 月から掲載した原稿に加筆修正を加えたものです。

十二小預言書は、旧約聖書の最後に収録された小さな預言書で、いずれも短いため、短時間で読破できます。しかし、私たちクリスチャンにとって、その内容はやや難解で、意味を理解するのは容易ではありません。

この小冊子は、それぞれの預言書の「読みどころ」を簡単に解説したものです。それぞれの小預言書の本文とあわせてお読みいただければ幸いです。

読む前に頭に入れておいていただくと良いのは、次のページに掲載した年代図です。ダビデが支配した王国は、ソロモン王の死後に南北に分裂しました。そして、北のイスラエル王国は不信仰な王が続きました。そこで、イスラエル王国の預言者たちは、不信仰を続けていけば、そのうちに神の怒りが下ると民に警告しましたが、彼らは悔い改めません。そして彼らは、アッシリアに滅ぼされてしまいます。

北が滅亡した後、南のユダ王国が滅びるまでには、しばらくの平和な期間があり、申命記改革などの信仰復興もありました。しかし、やがて神殿祭儀は形骸化し、人々は再び偶像礼拝へと傾斜して行きます。

一方、北王国を滅ぼしたアッシリアは弱体化し、新興勢力の新バビロニアに滅ぼされます。新バビロニアは南のユダ王国をも滅ぼし、ソロモン王が建てたエルサレムの神殿は無残に破壊されてしまうのです。

そしてイスラエルの人々はバビロンに移され、いわゆるバビロン捕囚と言われる時代が始まります。その時代に活躍したのはエゼキエルとダニエルですが、彼らの預言書は長いので「小預言書」には入っていません。

やがて新バビロニアはペルシャ帝国に滅ぼされます。ペルシャのクロス王は、エルサレムの神殿の再建を命じ、一部のユダヤ人たちは約束の地へと帰ります。彼らは神殿を再建しようとしませんが、様々な妨害でなかなか工事は進みません。この時期に人々を励ました預言者たちの言葉が、旧約聖書の最後をかざる 3 つの書（ハガイ、ゼカリヤ、マラキ）に記されています。

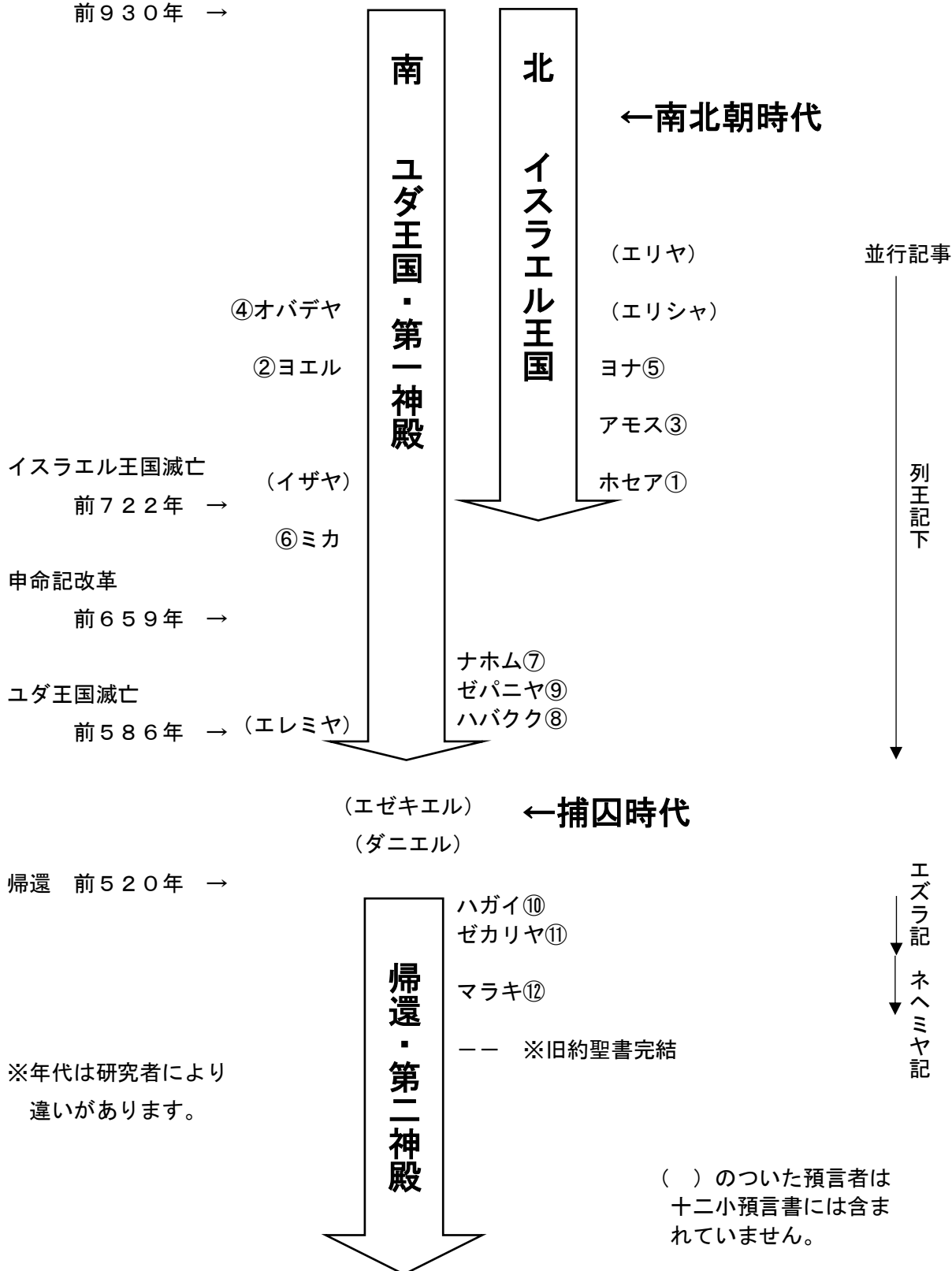
預言は、未来に起こる事柄の予告であると同時に、それぞれの時代の人々に対する神のメッセージであり、まずはその時代背景で読み解く必要があります。

では、それぞれの預言書をひもといて見ましょう。

十二小預言書の時代背景を知る

ソロモンの死後に王国が分裂

前930年 →



十二小預言書に学ぶ(1)

ホセア書 神の愛と怒り

ホセア書の主題は、日本の言葉で言えば「かわいさ余って憎さ百倍」。「女がその乳のみ子を忘れて、その腹の子を、あわれまないようなことがあろうか。たとい彼らが忘れるようなことがあっても、わたしは、あなたを忘れることはない」(イザヤ 49:15) という、神のイスラエルに対する愛の言葉は、一つ間違えると、とても恐ろしい結果を招くのです。

イスラエルの「淫行」

ホセア書は冒頭からイスラエルの民の「淫行」が語られます。今のイスラエルの性的退廃は世界最悪のレベルで、売春のための人身売買ではいつも外国から批判されています。そして、中絶の件数があまりに多く、様々な団体がプロライフ（中絶防止）の働きにかかわっています。

ホセアがここで指摘している「淫行」は、もちろん偶像礼拝のことですが、それもイスラエルに侵入しています。まさに「東の国からの占い師」(イザヤ 2:6) が国に満ちており、ニューエイジのフェスティバルは毎年盛況です。また、ホセアが嘆いたように、永遠の契約を与えられた神の民は、「真の神」を嫌って三千万の神々に出会うために、毎年大挙してインドやアジア各地を訪れるのです。

主の例祭の日になると、イスラエルが他国に行く(ホセア 9:5) とホセアは記していますが、現在のイスラエルでは、主の例祭は日本のゴールデンウィークと同じような海外旅行の期間となっています。この書は、まさに今のイスラエルを語っているかのようです。

逃げるイスラエルをつなぐ結婚

ホセアは淫行を行う女ゴメルと結婚し、淫行によって生まれた子を受け入れるようにと、神から命じられます。それは「行動預言」と呼ばれるもので、神がイスラエルの状態を示すために、それを生々しい事実で見せられたのです。主なる神から逃げて他の神々に走るイスラエルを、神は婚姻関係という「鎖」でつなぎとめようとされるのです。このように、神とイスラエルの関係を結婚と関係させて語ったのは、ホセアが最初だとされますが、それは、エレミヤからさらに新約聖書のキリストと教会の关系到までつながる重要な流れです。

ところで皆様は「アグノット」という言葉をご存知でしょうか。ユダヤ法においては妻が夫に愛想をつかして、他の人と結婚したいと考えても、夫が「離縁状」(マタイ 5:31 など)を書かない限り、離婚は成立しません。そこで、いつまでも夫が離縁状を書かないため、他の男性と結婚できない女性を「アグノット」(鎖でつながれた女)と言います。ユダヤ人社会には多くのアグノットがいて、社会問題になっています。彼女らの夫たちが離縁状を

書かないのは、たいてい離婚交渉を有利に進めるためなのですが、神が離縁しないのは永遠の愛のゆえです。

燃え上がる神の怒り

しかし、神の愛はあまりに深く、イスラエルに対する怒りは深まります。「彼らとその罪を認めて、わが顔をたずね求めるまで、わたしの所に帰っていよう」(5:15)と神は言われるのです。しかし、それに続いてエフライム(イスラエル)が悔い改めの言葉を述べても、神は簡単には受け入れません。神は昔の不信仰を持ち出して、なおもイスラエルを責められるのです。

そしてホセアは、13章の初めまで、赦すといいつつ、またも怒りをぶちまけます。そしてついに、神のイスラエルに対する怒りが頂点に達するのです。神は「子を取られた熊のようになって彼らに出会って、その胸をかきさき、その所で、ししのようにこれを食い尽くし、野の獣のようにこれをかき破る」(13:8)と言われます。「誰があなたを助けることができよう」(13:9)と神は問うのです。さらにホセアは「わたしは彼らを陰府の力から、あがなうことがあろうか。彼らを死から、あがなうことがあろうか。死よ、おまえの災はどこにあるのか。陰府よ、おまえの滅びはどこにあるのか。あわれみは、わたしの目から隠されている」(13:14)と続けます。何と恐ろしい言葉でしょうか。

ところが、この絶体絶命の恐ろしい預言を、パウロはIコリント 15:55で「死は勝利にのまれてしまった」と肯定的に解釈するのです。古代ヘブライ語には疑問符がないため14節は「わたしは彼らを陰府の力から、あがなう。わたしは彼らを死から、あがなう」とも訳せるからです。

「わたしのあわれみは、ことごとくもえ起こっている」(ホセア 11:8)と言われる神は、14章でイスラエルに悔い改めを呼びかけます。そして、ホセア書の最後には完全なイスラエルの癒しと、中東の平和が宣言されます。

ホセア書全体を通じ、偶像礼拝をする異邦人に対する怒りは、ほとんど何も書かれませんが、神の民であるイスラエルに対してだけ、神の怒りが燃えるのです。イスラエルに対する神の怒りは、強い愛の裏側です。イスラエルが悔い改め、アッシリヤ(アメリカ)や馬(軍備)に頼ることをやめる時(14:4)神は喜んでイスラエルを愛されるのです。

ホセア書の最後の節は、「知恵のある者はだれか。その人にこれらのことを悟らせよ。悟りある者はだれか。その人にこれらのことを知らせよ」という呼びかけで終わっています。クリスチャンたちは、聖霊によってこれを悟る必要があります。

十二小預言書に学ぶ(2)

ヨエル書 祭司の執り成し

十二小預言書の二番目の書であるヨエル書は、短い中に重要な主題がいくつか記されています。今回は「泣く祭司」による執り成しと、預言の成就に関する原則を中心に取り上げたいと思います。

大災害と悔い改めの呼びかけ

ヨエル書は、迫り来る大災害の場面から始まります。それは2章11節まで続く恐ろしい預言で、自然災害の予告に始まり、次に軍事勢力による侵略が語られます。まるで現在の「イスラム国」を思わせる強力な武装勢力の前に立って導いているのは、どうやら主ご自身(2:11)のようなのです。

しかし、次の12節では「今からでも……わたしに帰れ」(2:12)と悔い改めが呼びかけられます。続く13節にあるのは、ヨエル自身の言葉による、主が「災いを思いかえされる」という重要な解説。主が災いを予告される時、その第一の目的は悔い改めの呼びかけであって、未来の予告ではないのです。旧約聖書において、恵とあわれみにより災いを思いかえされた神は、新約聖書においてもⅡペテロ3:9などで、忍耐により人々に猶予を与えておられることがわかります。

ところが、全ての災いが悔い改めによって止められる保証はありません。それは、親が子供を叱った時に、子供が「ごめんなさい」と言えば必ず親が赦すとは限らないのと同じです。すでに学んだホセア書でも、口先だけの悔い改めを神が一蹴される下りがありました。だからヨエルは14節で「神があるいは立ち返り……はないと、だれが知るだろうか」という、非常に微妙な言い回しを用いているのです。

泣く祭司

民の悔い改めをリードするのは祭司たち。私たちもまた新約の祭司(Ⅰペテロ2:9)ですから、ここはしっかりと学ばなければなりません。祭司は何をしているのでしょうか。

- 1) ラッパを吹き鳴らしています。それは、人々の注意を喚起し、会衆を呼び集めるためです。
- 2) 普通の聖会には呼び出されない老人、幼な子、乳飲み子、そして戦争でさえも免除されている花嫁と花婿も呼び出されています。彼らは断食して身を清め、主の前に出ることを求められるのです。

3) 祭司は次に、廊と祭壇の間に立ちます。祭司は、神殿の奥の聖所に入ることも許されていますが、ここでは聖所に入らず、むしろ民のすぐ近く、民の見える場所に立って、民を代表して涙で神に祈り、人々に祈りの「手本」を示すのです。

4) 主の民が諸国民の「笑い草」にならないようにと、祭司は叫びます。これは、神がイスラエルの民を滅ぼし尽くそうとした時に、モーセが神に執成した（出エジプト記 32:12）論法です。これこそが、私たちがイスラエルのために執り成す「切り札」ではないでしょうか。世界中から集められた約束の民イスラエルは、今なお不信仰な状態ですが、だからといって神の怒りによりアラブ人に滅ぼされてしまったら「イスラエルの神など、やっぱりいなかった」と無神論者たちが「笑い草」にするでしょう。そうなっては神の御名が汚れてしまうのです。

民の悔い改めと、祭司の執り成しを聞かれた主は「自分の地のために、ねたみを起こし」、災いを思いかえされます。イスラエル、特にエルサレムは神が御名を置かれた場所（I 列王 8:16、11:36 ほか）であり、その地と御名のゆえに、主はイスラエルの民をあわれまれるのです。

預言の段階的成就

そしてイスラエルは「永遠にはずかしめられることがない」（2:27）と宣言されます。その次の 28-32 節には、「その後わたしはわが霊をすべての肉なる者に注ぐ」という、おなじみのペンテコステの日の預言が続きます。パウロは使徒行伝 2:16 で、この預言を引用してそれが成就したと宣言しているのは、皆様もご存知でしょう。

でも、ちょっと待って下さい。この預言がその日に成就したとすれば、もうイスラエルがはずかしめられることもなく、すぐに終末が来たはずですが、実際には二千年にわたって教会時代が続くことになりました。どうしてこんなことになったのでしょうか。これには2つの説明がありえます。一つにまとまって見える星座が、実は遠く離れた星々の集合であるように、ヨエルは複数の幻を重ね合わせて見たのだとする見解、そして、神がヨエルに見せた幻の一部だけを成就して後は延期されたのだ、とする見解です。ローマ 11 章でパウロが説いているのは後者の見解。つまり、イスラエルと異邦人の両方に悔い改めの機会をお与えになるために、わざと成就を遅らされたのだというわけです。

いずれにしても、ここから重要なことがわかります。預言書は、未来に起こる事柄の「時間表」ではないということ。むしろ、恐ろしい災害の預言を真剣に聞き、神の怒りを受け止めて涙の執り成しをする祭司の出現と、それに続く人々の悔い改めを神は待っておられるのです。

十二小預言書に学ぶ(3)

「主の日」を語る預言者アモス

アモス書の冒頭は「ユダの王ウジヤの世、イスラエルの王ヨアシの子ヤラベアムの世、地震の2年前」と、非常に正確な時期を特定しています。彼は北のイスラエル王国が末期を迎え、南のユダ王国もまた退廃して行く中で活動しました。この書は、イスラエルの救いと諸国民の救いの関係を、明確に描いているので、私たちにとって重要です。

諸国とイスラエル

1章から2章にかけては、ダマスコ、ガザ、ツロ、エドム、アンモン、モアブというイスラエルの周辺民族の罪が語られ、その後で、ユダとイスラエルの罪が指摘されます。

3章に入ると、選びの民であるイスラエルが、特に厳しい裁きを受ける（1～2節）という原則が語られます。旧約聖書を読んでいると、周囲の民よりもイスラエルの民の方が罪深いように錯覚しますが、そうではありません。異邦人の罪は、選びの民でないために見過ごしにされるのです。新約聖書においても、イエスはローマ人たちの罪はほとんど糾弾していませんが、それはローマ人たちが義人だったからではありません。

そして3章7～8節には、「主なる神は、そのしもべである預言者にその隠れた事を示さないでは何事をもなされない」という重要な原則が記されています。預言者というと、とても霊的に敏感で特別な天才のように考えますが、人は預言を与えられると、まるでライオンが吠えるのを聞いて恐れるのと同じように、人々に語らないではいられないのだと、アモスは言うのです。いざとなれば、神はロバにさえも預言をさせる（民数記 22:28）ことができるのです。

主の日を望む者

4章に入ると、災いを下してもイスラエルが悔い改めなかったと嘆く神の言葉が綴られ、5章では悔い改めが呼びかけられます。そして5章18節には「わざわざなるかな、主の日を望む者よ」という言葉があります。当時すでに「主の日」の到来を願っていた人々が多くいたことが分かります。再臨を待望する私たちは、ここに記された警告を心して聞かなければなりません。

「主の日」は、神が怒りによって罪人を滅ぼされる日です。アモスは「主の日」が来ても自分たちには災いは及ばない、他の民が裁かれるだけだと考える人々に鋭く警告します。

9章10節は、そういう人々は必ず剣で殺されると言っています。

災いを下すと宣言する神に、アモスは「ヤコブは小さい者です」（7章2節）と二度も執り成し、それは聞き入れられます。しかし、それは問題解決のための「時間稼ぎ」でしか

ありません。遅かれ早かれ、罪人には神の怒りが下るのです。与えられたわずかな時間に、預言者たちは人々に悔い改めを叫ばなければなりません。

主の言葉の「ききん」

ところが、日本でもイスラエルでも、人々は聞く耳を持たず、宣教は容易ではありません。こんな状態で、主の日が来たらどうなるのでしょうか。

しかし、8章11節以下には、不思議なことが預言されています。「主の言葉を聞くこと」の「ききん」が起こり、人々が「かわきのために気を失う」というのです。これはどんな状態でしょうか。今、人々はほとんど主の言葉を欲していません。私はギデオン協会の会員ですが、大学の校門前で、書店で買えば1冊何百円もする英日対訳の聖書を贈呈しても、受け取る学生はほとんどいません。西洋の文化の源泉である聖書は、たとえクリスチャンでなくても国際人として必須の教養ではないかと思うのですが、それでも受取を拒否しているのが日本の大学生。ところが、そういう人々が挙って「主の言葉を求めて、こなたかなたへはせまわる」というのです。

この「ききん」が起こる前に、クリスチャンを携挙するのが主のご計画かもしれません。しかし、もしも主が私の個人的な希望を聞いて下さるなら、その時こそ、地上に残って主の言葉を叫びたいものだと思います。

ダビデの幕屋の復興

最後に9章11節で語られるのは「ダビデの幕屋」の復興です。アモスはソロモンが建てた壮麗な第一神殿がまだ建っている時代にこの預言をしました。なぜソロモンの神殿ではなく「幕屋」なのでしょう。それは、すでに形骸化していた神殿での儀式ではなく、真に神と人が出合う場を意味していると思われる。

この預言は、使徒行伝15章16節でヤコブにより引用されました。それは、異邦人たちが主の民に加えられ、共に主を礼拝することを指していると、ヤコブは理解しました。アモス書の記事と使徒行伝の記事を比較すると、「エドム」が新約聖書では「人々」となっていることにお気付きになると思います。これは、ヘブライ語のアダム（人）とエドムは似ているので、七十人訳では「人々」と訳されているからです。

イスラエルの契約に諸国民が組み込まれるプロセスは、使徒行伝時代に始まりましたが、今なお続いています。「主の日」までに残された時間が、どれだけあるのか、私たちにはわかりません。しかし、世界が危機に瀕する今の時代は、イスラエルと世界における宣教のチャンスです。共に働こうではありませんか。

十二小預言書に学ぶ(4)オバデヤ書

イスラエルの苦難と私たち

オバデヤ書は旧約聖書中で最も短い書で、十二小預言書の中では最初期に書かれたと言われています。タルムードによると、オバデヤは列王記上 18 章に登場する人物で、迫害された預言者 100 人を、私財を投じて養ったのですが、そのために没落して借金を重ねることになったとか。列王記下 4 章でエリシャに助けられる未亡人こそ、オバデヤの妻だとする説もあります。

エドムについての預言

オバデヤ書は、ほぼ全体がエドムに対するメッセージです。実際にエドムの人々がこの書を読む機会は少なかったと思われるのに、これが旧約聖書に収録されているのは、第一にイスラエルに励ましを与えるため。第二に、異邦人に対する警告であると思われます。ここで指摘されるエドムの罪は何でしょうか。第一に高い所に住み、高慢になったことです。そのために、エドムは滅ぼされ、知者も勇士も奪われてしまいます。高慢は異邦人にとっても、ユダヤ人にとっても大きな罪であることは言うまでもありません。その主題は聖書全編にわたり繰り返されています。

しかし、11 節以降に書かれた主題は、他の預言にはあまり登場しません。それは「イスラエルの災いの日に、異邦人はどのような態度を取るべきか」という問題です。なぜそれが重要かという、イスラエルに対する裁きが、諸国民の裁きに先行するからです。(I ペテロ 4:17、アモス 3:2 など参照)

イスラエルが裁かれ、罰せられる時、異邦人に対する裁きはまだ始まっていません。これは、異邦人にとっては「刑の執行猶予」の期間であり、その間に正しく悔い改めることを私たちは求められるのです。

非難されるエドムの態度

イスラエルが諸国民に攻められ、滅びに直面しているのは神の意志です。だから、ここでオバデヤはイスラエルを攻めている異邦人たちを非難していません。むしろ、その状況を見たイスラエルの「兄弟」であるエドムの態度を厳しく非難しているのです。

彼の行動が 11 節に書かれています。彼は第一に離れて立っていました。傍観者だったのです。そして、エルサレムを分割する時に、外国人の一人のようだったのです。彼は直接的にイスラエル攻撃には加わらず、エルサレム分割にも参加しませんでした。それを傍観していました。その罪を神は厳しく追及しておられます。

それだけではありません。次の 12 節によると彼は「喜んで」「誇って」イスラエルの苦しみを眺めていたのです。「ざまあみろ。選民だと威張っているから、こういう目にあうのだ。我々は義人だから神に罰せられることはない」と、エドムは考えていたようです。ここでわざわざオバデヤが「エサウ」という言葉を使っているのは、現在のクリスチャンに対する警告だと私は思います。「エサウ」はユダヤ人たちがキリスト教徒のことを指して使う隠語です。また、神はここでエドムがイスラエルの「兄弟」であるから特に厳しく非難しておられますが、現代において私たちクリスチャンは、まさにイスラエルの兄弟としてオバデヤ書におけるエサウの場に立たされているのです。

イスラエルの政策を批判するクリスチャンは、エサウの霊に注意が必要です。謙遜な気持ちで長子イスラエルの悔い改めを祈るならともかく、「高慢なユダヤ人め。奴らが爆弾テロとロケット弾で罰せられるのはいい気味だ。もっと苦しめ」などと考えるようになると、とても危険です。オバデヤの警告に私たちは耳を傾けなければなりません。

セパラデにいるエルサレムの捕われ人

最後に、ちょっと話題になっている預言の言葉をご紹介します。それは、20 節にある「セパラデにいるエルサレムの捕われ人はネゲブの町々を獲る」という預言です。

「ネゲブの町々」の意味は明白ですが、「セパラデ」がどの場所を意味するのかわかりません。はっきり言えることは、この単語を現代ヘブライ語辞典で引くと「スペイン」と書いてあることです。スペイン系のユダヤ人を「セファラディ」と呼ぶのは皆さんもご存知でしょう。

セファラディたちは、中世にスペインで黄金時代を迎えますが、その後は激しい迫害を受け、多くの人々が強制的に「キリスト教徒」とされました。いわゆる「マラーノ」と呼ばれる人々です。彼らを「ユダヤ人」と認めるべきだとの動きが最近になって水面下で進んでいます。数百万人とも言われるマラーノは「セパラデにいるエルサレムの捕われ人」としてネゲブに移民するのでしょうか。

謎のようなオバデヤの預言の意味は、やがていつの日か明らかにされることでしょう。

十二小預言書に学ぶ(5)ヨナ書

「ヨナのしるし」とイスラエル

ヨナ書は他の預言書とは異なり、直接的な神の啓示の言葉という形を取らずに物語形式で叙述されています。私たちにとって重要なのは、イエスがマタイ12章で自らの死と復活を「ヨナのしるし」と言っているからです。しかも、イエスはニネベの人々の悔い改めを実際にあったこととして論じています。

神に逆らう預言者

ヨナ書の特異性は、預言者が神に逆らっていることです。確かに「ヨナ詩編」と呼ばれる2章の告白の中では、彼は悔い改めた信仰告白をしています。それ以外の部分は、あまり従順な行動を取っているとは言えません。

イスラム教においてもヨナは預言者として認められていますが、彼をめぐっては重大な議論があります。それは、イスラム教において預言者は無謬であると考えられているのに、ヨナが神に逆らっているからです。そこで、ヨナの「過ち」を何とかうまく説明しようと様々な理論が考えられました。

しかし、私たちにとっては「預言者の間違い」は全く問題ではありません。むしろ、神がヨナの反抗的な性格を知りつつも、ニネベに彼を派遣された、その理由が問題なのです。

驚異的な宣教

ニネベは巨大な町で、十二万人が暮らしていて、町を全部回るのに3日かかったと聖書は記しています。しかも、彼らは悪人で、その悪が神の前まで上って行ったというのです。圧政、弱者の虐待、犯罪、売春、その他のあらゆる悪が町に満ちていました。日本で宣教に苦勞しておられる皆さんは、そういう町に悔い改めをもたらすのが、いかに困難かわかりだと思えます。

ところが、ヨナは単身で町に入り、わずか1日の「宣教活動」を行っただけで、何と町全体が悔い改めたのです。1日で歩けるのは町の3分の1ですから、少なくとも3分の2の人々は、噂を聞いただけで悔い改めたことになります。

ヨナの語ったメッセージは単純でした。「40日を経たらニネベは滅びる」と彼は叫んだのです。もし、自分の住む町が40日後に災害で滅びるといような確かな情報が入ったら、人はどうするでしょうか。もちろん、誰もが町から逃げ出すことでしょう。ところが、聖書には、ニネベから人が逃げ出したという記録は一切ありません。彼らは「悔い改め」という、常識では考えられない選択をしたのです。

人々が悔い改めたのは、ヨナの運命を知ったからではないかと思えます。彼は三日間、大魚の腹にいたのですから、おそらくは異様な状態だったのでしょう。髪の毛が緑色に変色

していたかもしれません。肌もボロボロだったでしょう。「いったいどうしたんですか」と彼に聞いた人々は、ヨナから話を聞いて震え上がったに違いありません。神の命令を拒否して遠くに逃げようとした預言者でさえ、こんな罰をうけるなら、悪人である我々が神の怒りから逃げることは不可能だ。もう悔い改めるしかない、と彼らは考えたのです。ヨナ書の中で、ヨナの運命が異邦人に悔い改めをもたらすという主題は2度も繰り返されています。最初は船員たちがヨナの運命を見て主を信じています。彼らの祈り「この人の命のために、われわれを滅ぼさないでください」は、あたかも十字架の贖いの原理を指し示しているかのようです。

預言が成就しない時

ヨナがニネベで宣言したのは、40日後にニネベが滅びるという、無条件の預言でした。しかし、ニネベの人々は、なぜか神が「災いを思いかえす」ことを知っていました。それでも、悔い改めさえすれば、神がいつも災いを思いかえされるとは限りません。ここはとても重要なところですよ。ニネベの王の「あるいは神はみ心をかえ、その激しい怒りをやめて、われわれを滅ぼされないかもしれない。だれがそれを知るだろう」という言葉に注目して下さい。ここには、ヨエル2：14の悔い改めの呼びかけと同じ言葉が並んでいます。神はイスラエルにも異邦人にも、等しく悔い改めの機会を与え、ある時にはその悔い改めを受け入れられるのです。

しかし、悔い改めがいつでも通用するとは限りません。「だれがそれを知るだろう」という語法は、それがたえず神の恵みにかかっていることを示しています。

ユダヤのラビたちは、ヨナの運命が、イスラエル民族の苦難を象徴していると考えました。終りの時代である今、イスラエル回復という、もう一つの「ヨナのしるし」を神は世界に見せておられます。私たちは、時間が残されているうちに、人々に悔い改めを宣べ伝えなければなりません。

十二小預言書に学ぶ(6)ミカ書

エルサレムの破壊と復興

ローマによって破壊された神殿を見て、ラビたちが涙を流した時、ラビ・アキバは笑いました。同僚のラビたちは、アキバが狂ったと思ったのですが、彼は「シオンはあなたがたのゆえに田畑となって耕され…」(ミカ 3:12) という預言が成就した以上、復興の預言もまた成就すると語ったのです。今回は、この預言をしたミカについて学びましょう。

北王国の滅亡

ミカが活動した時期は冒頭の1節から、ちょうど北のイスラエル王国が滅びた時期であることがわかります。彼のメッセージは「イスラエル王国がこうして滅ぼされるなら、ユダ王国も同じように滅ぼされる。お前たちも同じ罪を犯しているではないか」というものでした。身近にいる者が神の裁きを受けた時、誰もが「あれは罪を犯したから罰を受けた。私は大丈夫」と考えるのですが、そうではありません。とりわけ神がイスラエルに罰をお与えになる時、それはたえず他に対する警告です。

とりわけ、イスラエルと共に契約を受け継ぐアブラハムの子孫(ローマ 4:16)としての地位を与えられた私たちは、イスラエルに対する神の激しい怒りの預言を読むとき「ああ、彼らは不信仰だが我々は大丈夫だ」などと、決して思ってははいけません。

私たちは、単にキリストの血による恵みを受けているだけであって、その実態は決してイスラエルよりも正しいわけではないのです。

イスラエル回復への道筋

しかし、イスラエルに対する罰は永遠ではありません。神は散らされた者たちを再びお集めになります。2:12-13によると、神は彼らを「おりの羊のように、牧場の中の群れのように共におく。これは人の多きによって騒がしくなる。打ち破る者は彼らに先だつて登りゆき、彼らは門を打ち破り、これをとおって外に出て行く。彼らの王はその前に進み、主はその先頭に立たれる」と言われます。神は羊たちを囲いの中に閉じ込めておきながら、羊たちがその囲いを打ち破ることを期待しておられます。ヨセフ・シュラム師は著書『隠された宝』(16P)で、イエスの「天国は激しく襲われている」(マタイ 11:12) という言葉は、このミカ書の言葉をモチーフにしていると指摘しています。

4章の冒頭には、イザヤ書2章とほとんど同じ言葉が並んでいます。イザヤかミカが、どちらかの作品をコピーしたと文献学者は言うでしょうが、あまりにも重要な預言なので、神が同じ言葉を2人に語らせたとも考えられます。「律法はシオンから出る」(ミカ 4:2、イザヤ 2:3) は、シナゴグの礼拝では必ず唱えられる言葉で、賛美歌がいくつも作られて

います。神殿の丘は、一時は荒れ果てても、終りの日には再びその地位を回復し、ユダヤ人だけでなく異邦人が「道」を学ぶためにエルサレムに集まるのです。

ベツレヘムとメシア誕生

5章に入ると、包囲攻撃を受けるイスラエル王国を思わせる記述の後で、クリスマス物語でおなじみの「ベツレヘム・エフラタよ、あなたはユダの氏族のうちで小さい者だが、イスラエルを治める者があなたのうちから、わたしのために出る」という言葉が続いています。ベツレヘムから治める者が出る、と聞けばユダヤ人なら誰でもダビデ王を思い出します。ミカの時代、ダビデ王はすでに死んで何百年の時が流れていました。ですから、ここで語られる王はメシアなのです。

興味深いことに、星を見てメシア誕生を悟った東方の博士たちは、ヘロデ王に会うまでメシアがベツレヘムに生まれることを知りませんでした。一方、ユダヤ人たちはメシアがベツレヘムに生まれることを、ミカの預言から知ってはいましたが、いつ生まれるかを知らなかったのです。メシアを迎えるには、異邦人とユダヤ人の協力が必要なのです。

タシリーク

ユダヤ新年（ロシュ・ハシャナ）の日に、エルサレムのホテルに泊まっていたことがあります。すると、ユダヤ人の超正統派の人々が、ホテルの中の噴水の近くに集まって何やら唱えながらポケットのチリを水の中に投げ込んでいました。それは「タシリーク」と呼ばれる儀式だと、あとで知りました。

新年から10日の大贖罪日に至るまで、ユダヤ人たちは悔い改めに専念します。その最初の日である1日に、彼らはミカ書 7:18-20 を朗読し、罪の象徴としてチリや小石、パンなどを流水に投げ込むのです。その際に朗読されるのは「…あなたはわれわれのもろもろの罪を海の深みに投げ入れ、昔からわれわれの先祖たちに誓われたように、真実をヤコブに示し、いつくしみをアブラハムに示される」という一節です。

ミカ書7章は、イスラエルの罪と、周辺の異邦人たちの罪によって混乱が頂点に達する様子を描き出しています。その時、御民が叫ぶと神は正しい裁きをされるのです。その後、神はイスラエルの罪を赦されるのだと、ミカは預言しています。

ラビ・アキバの時代から二千年。この預言の成就が成就する日は、ますます近づいているようです。

十二小預言書に学ぶ(7)ナホム書 イスラエルの救いと諸国民の処罰

ナホム書の主題はアッシリアの首都であるニネベに対する神の裁きです。アッシリアはイスラエル王国（北王国）を滅ぼした国です。

ヨナ書の中では悔い改めにより滅びを免れたニネベの町でしたが、それから約1世紀を経て書かれたナホム書では厳しい裁きを宣告されています。そしてこの町は、ナホムの預言通りに新バビロニアに滅ぼされてしまうのです。

悔い改めの機会は限られている

ヨナ書の寛大な処置に比べてみると、ナホム書で繰り返される断罪の言葉は際立ちます。「主は罰すべき者を決してゆるされない」(1:3)、「二度としかえしをする必要がないように敵を全く滅ぼされる」(1:9)、「彼は全く絶たれる」(1:15)などの言葉は、悔い改めの余地を残さないような厳しい調子です。

これを背景にヨナ書を読むと「あるいは神は御心をかえ、その激しい怒りをやめて、われわれを滅ぼされないかもしれない。だれがそれを知るだろう」という、ニネベの王の言葉が、とても重いものであることがわかります。

悔い改めは、いつでも許されるわけではなく、その機会は限られているのです。神の処罰が始まったら、もう悔い改めは許されません。ペテロは神が「ひとりも滅びることがなく、すべての者が悔い改めに至ることを望み、あなたがたに対して長く忍耐しておられる」(II ペテロ 3:9) と記しています。神は処罰をなるべく遅らせ、人々に悔い改めの機会をお与えになるのです。

ニネベの処罰とイスラエルの救い

ナホム書の前半では、ニネベに対する厳しい宣告の間に、イスラエルの救いがちりばめられています。イスラエルに対しては、「主は恵み深く、なやみの日の要害」(1:7)、そして「わたしはあなたを苦しめたが、重ねてあなたを苦しめない」(1:12)などと慰めが語られます。「あなた」の指すところが、頻繁に入れ替わっています。

旧約聖書で繰り返されるのは、イスラエルの不信仰に対する神の怒りと処罰です。しかし、イスラエルよりもはるかに悪い諸国民に対しても「怒ること遅い」主は、じっと怒りをこらえておられるのです。「さばきが神の家から始められる」(I ペテロ 4:17)とペテロが書いているように、神の民が先に裁かれ、次に諸国民が裁かれます。この順序はとても重要です。

諸国民に対する神の怒りが臨界点に達して、ついに諸国民に怒りの鉄槌が下される時、イスラエルに対する裁きの時は終わります。イスラエルの救いの日は、諸国民に対する処罰の日でもあるのです。

私たちはイスラエルの救いを祈っていますが、それが異邦人に対する厳しい処罰と表裏一体であることを忘れてはなりません。もしも、日本がニネベと同様に厳しい裁きを受けるとすれば、私たちは「イスラエルの救いを祈ってさえいれば祝福がある」と楽観してはいられません。

ニネベはなぜ裁かれたのか

ナホム書から、神の怒りがニネベに下された理由を知ることができます。「主に対して悪事をはかり、よこしまなことを勧める者が、あなたのうちから出た」(1:11)と主はニネベを非難されます。これは重大な言葉です。この悪い人物が単数形で書かれているところを見ると、たった1人でも悪事をはかる人物が出ると、町や国が罰を受けるのです。たぶん、その人物は多くの人に悪事を勧めたので、神のご計画を大いに妨害したのでしょう。さらに、3章では周囲の諸国民に対する悪事が痛烈に糾弾されます。イスラエル王国を滅ぼしたことよりも、さらに大きく取り上げられているのが、それ以外の諸国民を苦しめたこと。ナホム書を読むと、イスラエルだけが偏愛されているように錯覚しがちですが、そうではありません。

問いかけて終わる2つの書

ニネベに関する2つの書、ヨナ書とナホム書には奇妙な共通点があります。どちらの書も読者に問いかける疑問文で終わっており、答えがありません。神はヨナ書の最後で「この大きな町ニネベを、惜しまないでいられようか」と問いかけ、ナホム書の最後では「あなた(ニネベ)の悪を身に受けなかったような者が、だれひとりあるか」と問いかけておられます。

答えの無い2つの問いは、いずれも諸国民に対する神の愛を示します。神は諸国民を愛されるがゆえに、害悪をふりまくニネベを滅ぼさざるを得ませんでした。

イスラエルの国が回復された現在、神の諸国民に対する裁きの時もまた近づいています。悔い改めたニネベと、悔い改められなかったニネベ。疑問文で終わる2つの書は「あなたの国、あなたの町はどちらなのか」と問いかけているかのようです。

私たちは、イスラエル回復のために祈ると同時に、異邦人、とりわけ日本の悔い改めのためにも祈らなければなりません。

十二小預言書に学ぶ(8)ハバクク書

信仰による義人は生きる

今回学ぶハバクク書は、わずか3章の短い書ですが、2:4の「信仰による義人は生きる」という言葉は、新約聖書のローマ 1:17、ガラテヤ 3:11、ヘブル 10:37-38 で計3回も引用されています。また、死海文書の中のハバクク書注解(1QpHab)という巻物から、イエスと同時代に活動したクムラン共同体の人々もまた、この書に注目していたことがわかっています。

預言者ハバククの時代

この書の内容や外典の「ダニエル書補遺」の記述から、預言者ハバククはユダ王国末期に活動した祭司であると見られています。北のイスラエル王国がアッシリアに滅ぼされ、残った南の王国の存立も危うくなる状況の中で彼は活動しました。

ハバククは冒頭から、悪人がなぜ神に裁かれないうままに悪事を重ねるのか、という問題を提起します。ハバククが厳しく糾弾する悪人たちは、いったい誰なのでしょう。「律法はゆるみ、公義は行われず…」(1:4)という下りは、イスラエルの指導者の悪、腐敗した宗教を示しているように思えます。しかし「無情にも諸国民を殺す」(1:17)はどうでしょうか。イスラエルは当時、弱体化していて諸国民を虐殺する力などありませんでした。だから、この下りは当時の強国で横暴の限りを尽くしていたアッシリアを指すと思われる。ハバククの怒りは、不正なイスラエルの指導者と、暴虐の限りを尽くすアッシリアの両者に向けられているようです。

旧約聖書においては、イスラエルの民族的な不信仰に神がお怒りになると、その結果、諸国民がイスラエルを攻撃するという原則があります。ですから、「悪しき者が自分よりも正しい者を、のみ食らう」(1:13)という社会的な不公平に対して怒りをぶつけるハバククにとって、悪い民の指導者とアッシリアは重なっているのです。

神を見張る預言者

預言者ハバククは、王の所に行って不正を糾弾したり、あるいは人々に悔い改めを迫ったりはしません。彼はただ神に、その解決策を求めて訴えるのです。彼は「わたしの見張所」に立って見張る(2:1)と言うのですが、彼が見張っているのは人ではありません。神がどういう答えをされるかを、じっと見張っているのです、神が人を見張ると考えるのが普通ですが、聖書には人が神を見張るという表現があります。イザヤ書 62:6-7 に登場する、城壁の上に立てられた見張人は、主がお休みならないように、見張っていて叫び続けなければなりません。

主がどのような解決策をもたらされるかを見張るハバククは、新バビロニア帝国（カルデア人）の勃興を見ます。そして、彼らによって悪の帝国アッシリアに神の裁きが下ると、彼は預言するのです。3章の「ハバククの祈り」では、諸国民に対する裁きと、神の民に対する救いが高らかに語られます。

歴史上、イスラエルを苦しめた者たちは、神によって起こされた他の勢力によって全て滅ぼされて来ました。全能の神の御手により、どんな悪人たちも、いつか必ず裁きを受けるのです。

しかし、それはすぐには起こりません。ハバククは「この幻はなお定められたときを待ち、終りをさして急いでいる。それは偽りではない。もしおそれれば待つておれ。それは必ず臨む。滞りはしない」(2:3)と宣言します。救いを信じ、それをじっと待つ。だから「義人はその信仰によって生きる」(2:4)と彼は言うのです。

現在「イスラエルを地図の上から消す」と声高に叫んでいる勢力は、遅かれ早かれ地図の上から消されるでしょう。問題は、私たちがそれを信じて待てるかどうかなのです。

「生きる」が意味するもの

人生の苦難は、時代を超えた主題です。どんな国のどの時代でも、人は様々な不条理の中で生かされてきました。その解決を求めて叫ぶ人々を励まし、神から与えられる解決を信じて待つようにと教えるところに、ハバクク書の力があります。ところが、新約聖書の記者たちは「信仰による義人は生きる」という預言を現実的な問題解決というレベルから一歩進め、永遠の生命の約束として理解しました。

あらゆる不条理の根源は、人が罪の結果、死ぬようになったこと。だから聖書は死が最後の敵（I コリント 15:26）だと教え、それはメシアによって滅ぼされると約束します。その約束の保証が、イスラエル民族の存在なのです。だからパウロは、イスラエルの回復が「死人の復活」（ローマ 11:15）だと語りました。

イスラエルの敵が滅ぼされる日を預言したハバククの言葉を、永遠の命の約束だと説き明かした新約聖書の言葉は、まさに正鵠を射ているのです。

十二小預言書に学ぶ(9)ゼパニヤ書

危機の中で輝く主の恵み

ゼパニヤ書はたった3章の書で、新約聖書での引用もありません。しかし、この書にはエルサレムの裁きから始まり世界の救済に至るロードマップが明確に描き出されています。ユダ王国末期、ヨシヤ王の申命記改革と同時期に書かれたと見られるこの書は、私たちの時代にも通じる多くの教訓を含んでいるのです。

エルサレムから始まる裁き

「裁きが神の家から始まる」(Iペテロ 4:17) という言葉の通り、この書はエルサレムに対する裁きから始まります。系図の後の本文冒頭は「地のおもてからすべてのものを一掃する」(1:2) という厳しい言葉。非難されているのはエルサレムの指導者なのですが、1:3によれば、獣、空の鳥、海の魚までが滅ぼされるのです。これは、人の悪により全世界が滅ぼされたノアの洪水を思わせます。エルサレムの不信仰は、美しい地球を台無しにしてしまう全人類の不信仰の象徴なのです。しかし、エルサレムが悔い改めると、全人類が神を信じ、さらに自然界が回復します。

1:7には「主の日は近づき、主はすでに犠牲を備え、その招いた者を聖別された」という難解な言葉があります。ここは、訳により解釈がまちまちなので、他の訳や原文も参照したいところ。私は、主が「招いた者を聖別された」という部分は、滅びを免れる残された人々(3:12など)を指すと考えます。神は、これから起こる恐ろしい災難の中でも、正しい少数の者を守られるのです。

続く1:8以下では、招かれなかった者たち、つまり、偶像礼拝と悪の限りを尽くす悪い指導者らが厳しく罰されます。ところが、注意深く読むと、ちょっと違った図式が見えて来ます。「叫び声」や「うめき声」(1:10)など、音響効果はすごいのですが、まだそれは「主の大いなる日」の予兆に過ぎません。「近い、近づいて、すみやかに来る」(1:14)というのですが、まだ来ていないのです。

その証拠に、2章に入ると人々が呼び集められます。まだ人々が集まって話を聞く時間があるのです。集められるのは「恥を知らぬ民」であって、「聖別」された人々ではありません。彼らに対する悔い改めの呼びかけは、2:3の「主の怒りの日に、あるいは隠されることもあろう」という微妙な言葉で締めくくられます。これは、ヨエル 2:14などに見られる、恵を暗示する言葉。彼らは「自身の正しさ」により義とされるのではなく、神の恵とあわれみで災難から救われます。選びの民を「一掃する」と言っておきながら、何とかして一人でも多く救おうという神の御心が、ここには、にじみ出ているのです。

神の怒りは諸国民に

イスラエルが悔い改めの呼びかけに応じるかどうかは明らかにされないまま、話題はガザ、アシケロン、エクロンなどペリシテ人の地の滅びに移ります。そこで早くも「ユダの家の残りの者」(2:7) が登場するところを見ると、どうやら神はイスラエルの多くの人々の悔い改めを受入れられるようです。

諸国民に対する裁きの場面は 3:8 まで延々と続きます。神は最後に「諸国民をよせ集め、もろもろの国を集めて、わが憤り、わが激しい怒りを、ことごとくその上に注ぐ……全地は、ねたむわたしの怒りの火に、焼き滅ぼされる」と宣言されるのです。全地の民、もちろん日本人も、神の怒りに消え失せてしまうのでしょうか。

ところが、完全に滅ぼされるはずの諸国民は、次の 9 節では「清きくちびる」を与えられ、主に仕えています。それもそのはず、よく 8 節を読み直すと「わたしの決意は」という言葉がついているではありませんか。

諸国民もまた、「わたしの怒りで全地をほろぼすぞ！」という神の「決意」をいち早く察知して、悔い改めなければなりません。そうでないと、神は決意を実行に移さなければならなくなってしまいますからです。

しかし、神は諸国民の悔い改めをも期待しておられるようで、ここからゼパニヤ書の最後まで 12 節は、祝福に満ちたメシア時代が語られています。

預言は成就している

今回、ゼパニヤ書を学んで驚いたのは「回復預言の成就」です。2:7 ではペリシテ人が追われた海岸地方にユダヤ人が住むという預言がありますが、そこでただ一ヶ所、言及されているのはアシケロン。現在約 13 万人が暮らす地方都市ですが、独立戦争直後に、パレスチナ人たちは全員がガザや西岸地区に移され、現在は預言通りにユダヤ人の町となっています。

もう一か所、3:10 の「エチオピア（クシュ）の川々の向こう」から、失われたユダヤ人たちが帰還するという預言もまた、文字通りに成就しました。現在、エチオピア系ユダヤ人たちが多数、イスラエルに帰還しており、多くのメシアニック・コングリゲーションで彼らを見ることができます。

ゼパニヤ書の中のアッスリヤの滅び (2:13) は、後から書いた「事後予言」に過ぎないと、文献学者たちは言うでしょう。しかし、上記の 2 つの預言が、その事が起こる二千数百年前になされていたことは、誰も否定できません。ゼパニヤ書は単なる「歴史文学」ではなく、恐るべき神の言葉なのです。この書のメッセージを、私たちは心して聞かねばなりません。

十二小預言書に学ぶ(10)ハガイ書

荒れ果てた主の家を再建するように励ました預言者

ハガイ書はユダヤ人たちに宮の再建を強く勧め、励ます内容です。この預言に励まされて人々が建てた神殿（第二神殿）を、イエスは「私の父の家」（ルカ 2:49、ヨハネ 2:16）と呼びました。神は手で作った神殿の内にはお住まいになりませんが、それでも神殿は重要な御業の舞台なのです。

4 か月足らずの間に行われた預言

ハガイ書は非常に正確な日付から始まっており、ダリヨス王の2年の6月1日から9月24日までの記録が日を追って綴られています。その時に中断していた第二神殿の建設工事が語られていて、その工事を進めるようにと、ハガイは呼びかけます。

注目すべき箇所は 2:4 以下ですが、ここには主が御業によって宮の建設を助けるという約束があります。そして 2:6 では「いま一度、わたしは天と、地と、海と、かわいた地を震う」と約束されるのです。それは、ハガイ書の中でただ一か所、新約聖書に引用された言葉で、ヘブル書 12:26 に登場します。ところが、ヘブル書の記者は、この預言がまだ成就していないものと考え、終末時代に成就すると見ているのです。

続くハガイ 2:7 では、主が万国民を震われると、財宝がエルサレムの主の宮に満ちると預言されています。この預言が第二神殿時代に成就したとは思えません。似た預言は、イザヤ 60:11 などにも見られ、エルサレムに諸国の富が運ばれて来て、町の門がたえず開くようになることと記されています。どうやら、ハガイとイザヤは同じ幻を見せられているようなのですが、これは明らかに終末に成就する預言です。

ハガイは彼の時代に再建される神殿の栄光と、それから数千年後に訪れる再臨のメシア時代の栄光を同時に垣間見せられているのです。

停滞していた宮の再建工事

ハガイ書の時代背景は、エズラ記の初めの方の並行記事に書かれています。クロス王からの帰還命令を受け、宮の再建の許可を得たゼルバベルたちは、資材も資金も与えられて約束の地に帰るのです。しかし、様々な妨害が入り、そのまま工事は中断して数十年の長い年月が流れてしまいました。聖書全体を鳥瞰すれば、20年程度の期間など、ほんの一瞬のようなものですが、短い人間の一生に比べると、それは過酷な状況でした。

工事現場はきっと荒れ果て、子供たちの遊び場と化していたかもしれません。工事が止まってから生まれた人々は、それが工事現場であることさえ、知らなかったのではないのでしょうか。二十年も経てば、工事の主力となる若い人々は、みんな約束の地で育った若者たち。着工当時の人々の熱気（エズラ 3:10-13）を知らない世代でした。

「神殿の再建」など、たぶん「老人のたわごと」だと考えていたであろう若者たちに「神殿を再建せよ」と語りかけ、励ましたのが、預言者ハガイやゼカリヤだったのです。

自分たちが立派な家に住んでいるのに、主の家の再建工事を放置しているという指摘から、ハガイ書は始まります。そして、再建工事を進めるなら、大いに祝福を与えると、神は約束されるのです。そしてこの書の最後は、ゼルバベルを「印章のようにする」という言葉で終わっています。彼の作るもの全てに神の名が刻印されるという意味です。彼はすでにその使命を数十年前に受けていましたが、それをあきらめて、忘れかけていました。ハガイはそれを「思い出せ」と呼びかけたのです。

神殿も幕屋も、本当に神が住まれる場所ではありません。そこに「神の名」が置かれるにすぎないのです。ですから、神殿を過大評価して偶像にするのは行き過ぎですが、それでも神は、その名を置く場、その名を担う人々を必要とされていました。それは、約 500 年後にイエス・キリストによる世界の贖いの業が行われる重要な舞台だったからです。

ハガイは、世界の贖いに向けた壮大な計画のために、この宮が用いられると示唆し、ゼルバベルたちを励ましました。

今の時代とハガイの時代

最初は熱く燃えていた運動でも、年月と共に沈静化し、次の世代は目標を見失ってしまいがち。人間は年月の荒波には弱いのです。イスラエルでも、最後の建国の父だったペレス氏が世を去り、メシアニック運動も初期の指導者から次世代の指導者へと運動が引き継がれつつあります。いつの時代でも、次世代にビジョンを受け継いで行くのは簡単なことではありません。

ですから「勇気を出せ」と語りかけたハガイの言葉は、今の私たちに対する言葉でもあります。昔の熱心を忘れ、意気消沈しかけていたヘブル人たちを励ますために手紙を書いたヘブル書の記者が、ハガイ書の言葉を引用したのは、状況がその時代にぴったりだったからです。神が天と地とを震わせる時代は、ハガイ書の時代よりも、ヘブル書の時代よりも、さらに私たちの目の前に迫っています。

再臨の兆候が強まり、時が迫っている中、私たちも勇気を出し、期待を持って若い人々を励まして行こうではありませんか。

十二小預言書に学ぶ(11)ゼカリヤ書

「権勢によらず、能力によらず、わたしの霊による」

ゼカリヤ書は、ハガイ書とほぼ同時期に書かれており、ユダヤ人たちに宮の再建を強く勧めています。この書については、ヨセフ・シュラム師も詳しく語っておられますが、その時にふれられなかった主題を中心に上げてみたいと思います。

イスラエルの先祖に対する神の怒り

神がイスラエルの不信に対してお怒りになるというのは、十二小預言書のほぼ全てに共通する主題です。しかし、1章には少し違った面からの言葉が述べられています。七十年の時間が過ぎたのに、エルサレムとユダの町々がまだ荒れ果てたまま(1:12)だと、主の使いが抗議するのです。

すると、主の言葉が与えられ、そこで重要なことが語られます。それは、イスラエルが荒れ果てているのに、安らかにいる国々の民に向けられた神の怒りです。彼らは、神の怒りをイスラエルに下すために、神に用いられました。ところが諸国民は「わたしが少しばかり怒ったのに、彼らは、大いにこれを悩ました」というのです。

イスラエルに対する、燃えるような神の怒りは、旧約聖書全体を通じた主要なテーマです。それを読んで行くと、イスラエルは神に呪われ、滅ぼされてしまうかのようです。これだけを読んでいると、イスラエルは神に捨てられたとする「置換神学」の方が正しいのではないかとさえ、思えて来ます。ところが、ここで神は「わたしが少しばかり怒ったのに」と言われるのです。

これはちょうど、親が子供を叱りつけて「出ていけ！」と怒鳴る場面に似ています。烈火のごとくに怒って、口では「出ていけ」と言っているのに、本当に追い出すつもりなどありません。ここで近所の人が行って、「あんたは何という子だ」と、その子のお尻を叩いたら、きっと親はその近所の人に怒り始めるでしょう。

それと同様、神がイスラエルに対して怒っておられるからというので、神様に「協力」するつもりでイスラエルを悩ませたりしたら大変なことになるのです。

大祭司ヨシュアとゼルバベル

この2人は、神殿の再建工事の責任者でした。彼らは資金も資材も人も、全て与えられていましたが、外敵の妨害で工事がストップしていたのです。そして、この箇所から予想されるのは、この2人の関係があまり良くなかったのではないかということです。

だいたい、指導者たちの人間関係が悪いと、物事は決して良い方向には進みません。本来の目的よりも、2人の確執の方にとらわれてしまうからです。4章に書かれている2本のオリーブの木とメノラの幻は、それを表しているのではないかと思います。ちなみに、オ

リーブの木とメノラを配したイスラエルの国章（ナショナルエンブレム）は、この幻から来ているとも言われます。

4:1-3 の記述によると、油を注ぎ出す2本の木があり、そこから注ぎ出す油が一つの器に集められ、それが7つの燭台に分配されます。この2本のオリーブの木は、2人の油注がれた者（4:14）だと言われています。すなわち、大祭司ヨシュアとゼルバベルが、それぞれの油注ぎを活かして協力すべきだと、この預言は語っているのです。

「権勢によらず、能力によらず、わたしの霊による」（4:6）は、決して超自然的な現象ではありません。彼らはクロス王の許可と、資金も資材も人も、全て与えられていたが、ただ勇気が無かったのも、それを実現できなかったのです。だから、私は超自然的な力は使わない。すでに私が与えたものを使いなさい、と主は言われます。

またしても主題は終末へ

神殿の再建について語ったゼカリヤは、8章に入ると、再建された神殿の栄光をはるかに超えて終末について語り始めます。ハガイ書において再建された神殿と共に終末が語られたように、ゼカリヤ書においてもそのパターンが繰り返されます。

彼らは預言の地平線の彼方に、神殿の再建、イエスの初降臨、そして私たちもまだ見えない再臨を見ていました。12章の冒頭にはまた、エルサレムを諸国民が攻め、その町が「重い石」のようになるという預言があります。最近になって、100年以上前のエルサレムの写真が数多く公開されるようになりました。それを見ると、荒れ果てて、あまり人が住んでいないこの町を、諸国民が攻めることなど想像できません。しかし、イスラム教国が躍起になってエルサレムとユダヤ人の関係を否定しようとしている現在、諸国民が挙ってエルサレムに住むユダヤ人を攻めるというゼカリヤの預言は、とても現実的なシナリオとなっています。エルサレムを持ち上げようとする「大傷を受ける」と警告されているにもかかわらず、多くの人々が何とかこれを「持ち上げ」ようとするのは、何と不思議なことでしょう。

本誌読者の皆様は、ゼカリヤ書の最後の14:16にある、諸国民のうちの生き残った者たちがエルサレムに上って仮庵の祭を祝うという預言をご存じだと思います。ICEJが主催する仮庵の祭パレードには、今年も多くの国々からクリスチャンたちが集いました。

12:10には、イスラエル回復預言の中でも最も重要なものの一つ「彼らはその刺した者を見る時、ひとり子のために嘆くように…」がありますが、この預言の成就もまた、これまでにないほど近づいているようです。

十二小預言書に学ぶ(12)マラキ書

主の大いなる恐るべき日が来る前にエリヤが来る

マラキは第二神殿が完成した後の時代に活動しました。神殿は完成したものの、一時の熱狂はすぐに冷め、人々は他民族と結婚してアイデンティティを失うようになり、神を軽んじました。十二小預言書の最後であり、旧約聖書の最後の書でもあるこの書を、一緒に味わってみましょう。

ヤコブを愛しエサウを憎んだ

本書の冒頭は、ローマ 9:13 に引用された、衝撃的な言葉から始まっています。マラキ書の文脈は、神が特別にイスラエルを愛したのに、イスラエルはなぜそれに応えないのか、という叱責です。ところが、これをパウロはこの叱責を逆手に取って、イスラエルの頑迷もまた、神の深いご計画だと示唆します。ラビとしての教育を受けたパウロは、まるで有能な弁護士のように、神の言葉を用いて巧みにイスラエルを弁護するのです。

マラキ書の言葉は、ユダヤ人だけに対する警告ではありません。私たちクリスチャンもまた、神に愛されているからです。日本人の中でたった1%のクリスチャンとして贖われた私たちが、神に特別に愛されないはずがあるでしょうか。ところが、私たちはついつい、イスラエルと同じように「あなたはどんなふうに、われわれを愛されたか」(1:2)とってしまいます。

今、この世の中で成功している人々の方が、何となく神に寵愛されているように思えるのは人の常。しかし、彼らが悔い改めないなら、最後に神は彼らを罰されるのです。それを信仰によって先に見よという教えは、預言書に何度も繰り返された主題です。

形式的な礼拝と捧げもの

マラキ書というと、私たちにとって最もおなじみなのは什一献金に関する教え(3:10)ではないでしょうか。旧約聖書の最後の3つの書が、いずれも献金や奉仕に関するモラルを説いているのは、とても興味深いことです。

イザヤ 1:11 以下や、エレミヤ 7:22 で神は、犠牲が無意味だとして、まずは人間的なモラルを高めよと説いています。一方、ここでは犠牲をしっかりと捧げよと説かれているのです。これを律法主義的に解釈しようとすると、いったい犠牲は必要なのか必要でないのか、わからなくなります。クリスチャンは、旧約聖書の律法は「廃止」されたと言っておきながら、什一献金だけは有効だとする見解が多いですが、什一献金でも誤った対応をすると、ユダヤ人と同じ結果を招きます。

神が問題にしているのは、心からの行為ではない宗教儀式でした。彼らは義務感で「いやいや」していたので、その自然な結果として、最も利用価値の無い傷物の獣を犠牲にして

いたのです。献金にささげる紙幣は、新札を使うべきだと、若い頃に父から教えられたのを思い出します。これは神に対する「気持ち」の問題なのです。

次に非難されているのは祭司たち。「レビと結んだ契約」(2:4) がどこに出て来るかは議論があるようですが、とにかく祭司たちは人々を教え導く責任を負っていました。彼らは什一献金を受け取り、それによって生活する特権を与えられていたのですが、それは教える責任を果たすことが条件でした。ですから、その責任を果たさない祭司は厳しい非難を受けます。什一献金をごまかして満額払わない人々に対する批判は、祭司への批判のあとなのです。献金を受け取る立場の人々は心しなければなりません。

エリヤが来る目的は

最終章が近づくと、恐るべき主の裁きが語られます。その時、悪人たちは焼き尽くされ、根も枝も残らないと、主は宣言されるのです。しかし「主を恐れる者、およびその名を心に留めている者」(3:16) は、主の特別の覚書によって守られ、あわれみを受けるのです。この「あわれみ」という用語は、主を恐れる人々が神の裁きの前に自信を持って立てるほど正しい人々ではないことを暗示しています。だから「自分に仕える子」のようにあわれむと主は言われるのです。

中東の文化においては、自分の身内や、気に入っている友人を優遇するのは当然の話。そういう価値観を背景に、聖書は神と人との関係を親子にたとえています。現代社会のように、たとえ身内であっても私情を一切交えずに、他の人と同じ扱いをするのが正義だ、という発想で聖書を読んでも理解できません。だから、神を「怒らせない」ことが、とても重要なのです。

そこで神は、「主の大いなる恐るべき日が来る前に、わたしは預言者エリヤをあなたがたにつかわす。……これはわたしが来て、のろいをもってこの国を撃つことのないようにするためである」(4:5-6) と言われます。エリヤが人々を悔い改めに導くのは、主が自らイスラエルを撃たなくてもよいためののです。

十二小預言書には、神のご計画が、様々な角度から描き出されています。そこには、厳しい裁きを宣言しておきながら、それを実行する前に人々が悔い改めることを期待するという、神のご性格が何度も何度も繰り返し描かれます。

イスラエルの回復と主の来臨を妨げているのは、ハマスでもファタハでも、イランでもなく、主を信じないイスラエルであり、また、せっかくイスラエルの頑迷によって福音を受け取る機会が与えられた(ローマ 11:11,25) のに、それを受け取らない異邦人なのです。神は自ら創造し、愛しておられるイスラエルも異邦人も撃ちたくはない。それを、旧約聖書の最後の言葉から、学ぶことができるのではないのでしょうか。